2023 年度日本比較文学会春季九州大会

日時：２０２３年７月１日(土)１３：００～１８：００

開催方法:対面･オンライン併用(ZOOM 会議のパスコードと ID は別途お知らせいたします)

研究発表会場：熊本大学黒髪北地区、くすの木会館レセプションルーム

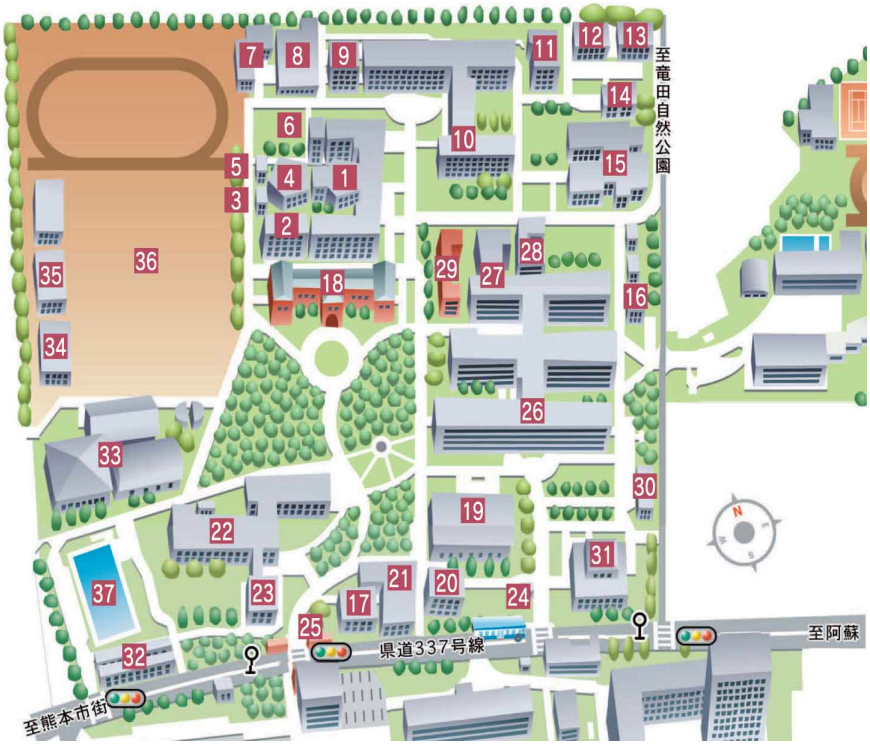
幹事会会場：同上文法棟 2 階小会議室

懇親会場：TRATTORIA Salute（熊本大学教育学部裏）

交通：　１、桜町バスターミナルから、産交バス or 電鉄バス：楠団地、光の森産交行き等〈子飼橋経由〉「熊本大学前」下車（１６番乗場、E　約２０分）

２、JR熊本駅から、産交バス：楠団地、光の森産交行き等〈子飼橋経由〉「熊本大学前」下車（２番乗場、約３０分）

所要時間：　上記の通りですが、バスの本数は１のほうが多い。よって、熊本駅から交通センターまで行って乗り換えてもよい。長距離バスで来られる場合、桜町バスターミナルまで行かずに、通町筋で降りても乗り換えられます。詳しくは大学のＨＰ（交通案内 ｜ 熊本大学 (kumamoto-u.ac.jp)をご参照ください。



熊本大学黒髪北地区キャンパス（〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2 丁目 40 番 1 号）

幹事会会場は「１」の２階「小会議室」、建物名称は「文法棟（または文法学部本館）」。
発表・シンポジウム会場は「１５」、建物は「くすの木会館」。

プログラム：

幹事会（１２：００−１２：５０）

開会　（１３：００）

総合司会　大場　健司（九州共立大学）

支部長挨拶　西槇　偉（熊本大学）

研究発表

（1）１３：１０−１３：４５

「泉鏡花の「日清戦争もの」におけるナショナル・アイデンティティの構築」

趙　海霞（熊本大学大学院）

司会：荒木　雪葉（福岡大学）

（2）１３：４５−１４：２０

「谷崎潤一郎「金と銀」の中国語翻訳について」

陳　竹（九州大学大学院）

司会：梁　艶（上海同済大学）

休憩　１４：２０−１４：３０

（3）１４：３０−１５：１５

「アンナ・ゼーガースと極東アジア　1951/1953　～中国との交流を中心に」

中原　綾（東京大学大学院修了）

司会：岩本　真理子（北九州市立大学元教授）

（4）１５：１５−１５：５０

「アイヌ口承文学が示す自然観」

大嶋　仁（福岡大学名誉教授）

司会：西槇　偉（熊本大学）

休憩　１５：５０−１６：００

シンポジウム：１６：００−１７：３０

「漱石とハーン――翻訳の視点から」

講師　坂元　昌樹（熊本大学）
藤原　まみ（山口大学）
松枝　佳奈（九州大学）
西槇　偉（熊本大学）
司会：徳永　光展（福岡工業大学）

総会：１７：３０－１８：００　司会　林　信蔵（福岡大学）

閉会の言葉　大嶋　仁（福岡大学名誉教授）

懇親会　１８：３０　司会　松枝　佳奈（九州大学）

予算：３０００円前後、院生２０００円

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

研究発表要旨

「泉鏡花の「日清戦争もの」におけるナショナル・アイデンティティの構築」

趙　海霞（熊本大学大学院）

日清戦争を背景とする泉鏡花の初期作品は「日清戦争もの」と呼ばれるが、これまでに「琵琶伝」「海城発電」が反戦的だと評されるのに対し、「予備兵」で泉鏡花が戦争を支持したという先行研究もある。この三篇の小説における主人公は作品に描かれた熱狂的な国民と異なり、非国民だとみなされる言動を取り非難されたことから、「予備兵」の清澄、「琵琶伝」の謙三郎、「海城発電」の愛三郎の内面の苦悩が生じたと思われる。

本発表では、「予備兵」「琵琶伝」「海城発電」における主人公と近代明治国家が求める国民像の相違点に着眼して分析を行い、国民というアイデンティティの構築過程を考察してみたい。作品にみられる国民というアイデンティティと自意識との矛盾が、悲劇的な結末をもたらしたと思われる。すなわち、国民としての日本人と、近代的自我に目覚めつつあった個人としての日本人の間に葛藤が浮き彫りになったのである。これは国民国家建設の途上に、国家と個人の相乗相克の過程で、小笠原幹夫『泉鏡花「予備兵」

「海城発電」』で指摘したように、「明治人のナショナリズムの健康さ」が感じられるのではないだろうか。

「谷崎潤一郎「金と銀」の中国語翻訳について」

陳　竹（九州大学大学院）

谷崎潤一郎の小説「金と銀」は最初、1918 年 6 月『黒潮』に掲載された。その後、タイトルを「二人の芸術家の話」と変更して、同年 7 月の『中央公論』臨時増刊号に改めて発表されている。「金と銀」の執筆当時、谷崎はエドガー・アラン・ポーの文学を愛読していたことなどから、この作品は日本の探偵小説史の流れに位置付けられている。だがその評価は「刺青」のような谷崎文学を代表する唯美主義作品にはむろん遠く及ばない。

しかし、この「金と銀」は 1924 年に近代中国知識人の穆儒丐の手により翻訳されており、「麒麟」に続く中国語翻訳第２篇目の谷崎作品となっている。当時中国文壇で大きな影響力を持っていた『盛京時報』に連載されたことは、近代中国に一定の影響を有したことを示唆しており、その意味でもこの作品の周辺については今一度掘り下げる価値があると考えている。本発表では、この穆儒丐訳「金と銀」を手掛かりに、1920 年代の中国における谷崎文学の受容について改めて検討を行いたい。

「アンナ・ゼーガースと極東アジア　1951/1953　～中国との交流を中心に」

中原　綾（東京大学大学院修了）

ドイツ民主共和国(東ドイツ)の作家アンナ・ゼーガースは、学生時代から後年まで中国文化芸術への関心を持ち続け、毛沢東文学理論(『文芸講話』)の受容を果たした。だが、彼女と中国を中心とした、朝鮮、日本など極東アジアへの視点は、いまだ十分に論じられていない。また、近年明らかにされた『文芸講話』における誤訳問題もゼーガース研究には反映されていない。本報告では、研究史の空白を埋める作業と共に、朝鮮、日本へも目を向けつつ体制と文学のはざまで呻吟する作家の姿を追う。

「アイヌ口承文学が示す自然観」

大嶋　仁（福岡大学名誉教授）

『アイヌ神謡集』の訳者知里幸恵は、アイヌ民族は自然と一体となって生活していたと述べている。そのようなアイヌの自然観がどういうものであったかを知るには、彼らの残した口承文学、とくに神謡というジャンルをつぶさに見るのがよい。

たとえば、「梟の神の自ら歌った謡」という神謡を見れば、人間が自然に対して敬意を持って接すれば、自然も人間の要望に応えるということが示されている。久保寺逸彦著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』に収められた神謡「古船の神の自叙」においても、同様の自然観が現れている。また、人間が造った船であっても神格化されており、船と人間の関係において相互の尊敬と愛情が重要であるとの見方が示されている。アイヌの自然観は万物を神性の現れと見る世界観の一部なのである。

アイヌ神謡はアイヌに厳密な意味での死がなかったことも示している。自然といえども、その魂は永遠で、表向きの姿だけが変ると見ているのである。

日本比較文学会九州支部春季大会シンポジウム
「漱石とハーン――翻訳の視点から」

日本近代の文学、文化に大きな足跡を残したラフカディオ・ハーンと夏目漱石、この二人は比較文学研究の重要なテーマであり続け、今日なお多様な研究が試みられている。熊本ではとりわけこの二人に強い関心が寄せられ、研究もなされてきた。熊本でのハーン及び漱石研究は、地域に根差した特色がある一方、比較文学研究の成果を享受し、それに刺激を受けてきたことも否めない。

2017 年に熊本大学文学部附属「漱石・八雲教育研究センター」が設立されてより、比較文学会九州支部と共同でシンポジウムを開催するなど、同センターは比較文学会と緊密な協力関係を築き、研究を推進してきた。

今回は、漱石・八雲教育研究センターと九州支部共催のシンポジウムとして、「翻訳」の視点からハーンと漱石に迫ってみたい。翻訳者としての漱石とハーン、英訳を通してロシア文学を受容する漱石、漱石作品の中国語訳など、講師 4 名が清新な論考を発表し、討議する。

「翻訳者としての夏目漱石――『文学論』『文学評論』を中心に」

坂元　昌樹（熊本大学）

夏目漱石による翻訳テクストとして、周知の通り、初期の「催眠術」（1892 年）や「詩伯テニソン」（1892-93 年）、後の「セルマの歌」「カリックスウラの詩」（1904 年）などがあり、また日本語から英語への翻訳としては同じく初期の「方丈記」英訳（1891 年）が知られる。漱石の小説や評論中に取り込まれた部分的な翻訳の例は数多いが、一方で『文学論』（1907 年）や『文学評論』（1909 年）に収録された各種の引用テクストに伴う日本語訳文が、翻訳という観点から論じられる機会はあまりないようである。『文学論』『文学評論』はその成立過程の問題も内包するが、収録された英語原文に対する日本語訳文を翻訳の観点から捉えるならば、漱石の翻訳に対する関心のあり方を一面では反映していると考えられる。報告では、『文学論』『文学評論』を中心としつつ周辺的論点にも言及し、翻訳者としての漱石の一面について素描してみたい。

「漱石のフランス文学――ハーンの英語翻訳に触れながら」

藤原　まみ（山口大学）

本発表は漱石が蔵書に施した書き入れや線引きの検討を通じて、漱石のフランス語文学受容について考察する。

漱石は様々な文化圏の文学から、Paolo Mantegazza の *Physiognomy and Expression*(1890)など、当時の最新科学に関する文献まで幅広く蔵していた。*Physiognomy* (観相学)は Théophile Gautier など当時の作家や、Gautier を愛読した Lafcadio Hearn にも影響を与えた似非科学である。*Physiognomy* に関する、漱石作品、Hearn 作品、Gautier 作品の関連性について考察するための準備として、本発表では、漱石全集漱石蔵書目録に収録されているフランス語文学のうち、書き入れや線引きがなされている Gautier 作品や Anatole France 作品などを素材にして、ハーンによる英語翻訳にも触れながら、漱石のフランス語文学受容の一側面について考察する。

「漱石のロシア文学受容再考の試み―漱石文庫を中心に」

松枝　佳奈（九州大学）

本発表は、東北大学附属図書館所蔵漱石文庫のロシア文学関係書籍の調査と、漱石のロシア文学受容に関する先行研究の整理と概観から、英書や英訳を中心とした夏目漱石のロシア文学受容の特徴を再考するものである。漱石の蔵書への書き入れのうち、特にこれまで見過ごされてきた線引きなどに一層注目する必要があり、それらからは漱石はロシア文学や文学者の特徴を理解し、ロシア文学作品の構成や登場人物の造型を創作に活かそうしたことがうかがわれる。英文学者であった漱石は、英語や英訳の文学評論や概説書に目を通して、英語でロシア文学一般や個別の作家の特徴を客観的につかみつつ、英語でロシア文学の作品を読んでいた。漱石のロシア文学受容が、ロシアからイギリス・英語圏への文学と文化の翻訳によって可能となったことを改めて認識することが重要である。

「『吾輩は猫である』の中国語訳について」

西槇　偉（熊本大学）

夏目漱石の作品のなかで、今日中国でもっとも知られ、読まれているのは、『吾輩は猫である』（以下『吾輩』）といえるかもしれない。なぜなら『我是猫』（『吾輩』の中国語訳書名）は各種世界名著シリーズに収録されたばかりでなく、小学校の国語教材（5 年生、2007 年）にも取り入れられ、翻訳の種類と版本の数は漱石のほかの作品に比べて抜群に多い。

なぜ『吾輩』はこれほど人気なのか。その翻訳受容について、すでに王志松氏らの研究がある。とはいえ、その後も新訳あるいは旧訳の新版は引きも切らずに刊行され、『吾輩』の翻訳受容は一層加熱しているように見える。

本発表では、名訳といわれるものや特色のあるものを取り上げ、中国における『吾輩』の翻訳（訳文）の特色、そして中国語訳から『吾輩』の新たな読みが見出せたらと考えている。